

暮らしの中の生きものたち

桜

このコーナーでは
身近でなじみ深い生きものたちを紹介しています

サクラの開花が待たれた春でした。戦後70年を超えて、お花見もすっかり平和な風景として定着したようです。「やすらい祭」(京都・今宮神社)のような息災への願いをもって、それぞれが花を愛でるひとときになっているのかもしれませんが。ソメイヨシノだけでなく、いろいろな桜に目を向けて、魅力あふれる樹木・サクラに出会い直したいと思います。

サクラは花托筒があることで括られるバラ科の仲間で、そのなかのサクラ属にはアンズ、アーモンド、ウワミズザクラなども含まれます。サクラ属に共通する特徴は、葉身が開くまで光合成を助ける托葉を持つこと、堅い殻を被った核果を持つことなどです。サクランゴやモモやウメのたねが核果、アーモンドは、核果の中の仁を食べています。

日本の山野にはヤマザクラ、オオヤマザクラ、カスミザクラ、マメザクラ、チョウジザクラ、エドヒガン、オオシマザクラなどの15種類ほどが自生していて、園芸品種は、江戸時代後期につくり出されたソメイヨシノをはじめとして300にも上ります。

大正11年に植えられた哲学の道の「関雪桜」は、植え替えなどの手入れもされて今も旺盛です。そのソメイヨシノが佳境を迎える頃、山の斜面のところどころではヤマザクラが淡い桜色を浮き立たせます。ヤマザクラとカスミザクラが近くにあると、訪花昆虫を分かち合うためか開花の時期がずれるといわれます。法然院の森でもまずヤマザクラ、遅れてカスミザクラが咲きます。今年のカスミザクラは4月22日になってもまだ蕾でした。森には小さな花が列状に咲くウワミズザクラもあり、それぞれの花に30本もの長い雄蕊が伸びて、まるでブラシのように見えます。

「花は葉の変容したものである」といったゲーテの慧眼は有名です。八重桜には、なんと雌蕊が緑の葉に先祖返りした品種があり、その形がゾウに乗る普賢菩薩のようだと「普賢象」の名が付いています。八重桜の花弁はたくさんの雄蕊が変化したものだそうです。

サクラの雌蕊は必ず一本ですが、同じサクラ属でもウメには複数あるものも見られます。これもなんと八本もの雌蕊を持つ品種があり、八つの実をつける(落果しながら熟す)ため、「座論梅」「八ツ房梅」の名が付いて、阿賀野市の梅護寺のものは「親鸞聖人の越後七不思議」と語られています。

「花といえば梅」もありつつ、やはり「花といえば(山)桜」であった日本では、万葉集から、西行、兼好法師、芭蕉、本居宣長と、強い思いが表されてきました。『櫻史』をパラパラとめくってみてもその濃密さに驚かされます。

サクラの材は均質で堅いため、非常に重宝されたものです。江戸時代の浮世絵や本の版木もサクラに限り、光沢のでる材は箆筒、棚、長火鉢にも使われてきました。椎葉村では、「竿家造り」と呼ばれる横長の民家を貫く仕切りの縁長押が継ぎ足しのない桜材であることを、椎葉クニ子さんが教えて下さいました。広葉樹を材に育てる技が衰退して、現代は、燻製づくりに使われるチップ、樹皮をはがして作られる角館の樺細工などがよく知られた使い道となっています。

身の回りの生きものに暮らしも文化も支えられていることを知る重要性から、生物多様性が注目されてきました。サクラたちが葉柄の蜜腺だけでなく托葉の先端からも蜜を出しているのは、アリを呼んで害虫退治をしてもらうためです。桜並木がよく保たれている哲学の道は、その幼虫が古木の空隙にできるハリブトシリアゲアリの巣の中で育つチョウ・キマダラルリツバメの貴重な生息地として「京都の自然200選」に指定されました。サクラとアリとチョウが教えてくれる生物多様性です。



萼筒が細長いキンキマメザクラ
2017.4.18 大悲山



ヤマザクラ
2017.4.10 法然院の森↑
2017.4.23 花背↓



ウワミズザクラ
2017.4.22 法然院の森



咲き始めたソメイヨシノ
2017.4.6 哲学の道